12月 園だより

令和7年　12月１日
佛教大学附属こども園

「仏教保育　12月のねらい」
にんにくじきゅう
忍辱持久

こころのねっこ
Bukkyo University
Kindergarten Since 1976

「下に降りたい」

北風が冷たくなってきましたが、晴れの日は暖かい日差しが差し込む日もあります。そのような日は園庭に０歳児から５歳児の子どもたちが出てきて遊びます。

園庭で、自分の触りたいもの、やってみたいものに触れてみようとする０歳１歳２歳の子どもたちに、お兄さんやお姉さんが関わる姿があちらこちらで見られます。

２歳のＡちゃん。お部屋の前のジャングラミングにのぼりました。のぼったものの、滑るときにはドキドキしている様子です。

「下に降りたい」とＡちゃんがつぶやきました。

それを見た４歳の子どもたちは次々に

「こうやって降りるんやで」

「難しいかな。こうやっても降りられるで」などなど…

２歳の子が自分で下に降りることができるように、いろいろな方法で声をかけ、モデルになり、応援し、滑り降りることができるまで、見守ってくれたのでした。たった一言つぶやく姿に「困っているのかな」「おりたいのかな」「怖いのかな」「この子には何ができるのかな」と相手をわかろうとする子どもの姿に驚かされます。

赤ちゃんも子どもも、「正しいもの」「美しいもの」「本物」を感じ取る力を持っていることが、近頃の研究では確かになってきたといわれています。きっと４歳の子どもたちが自分のために一生懸命考えてくれる姿から、２歳の子どもたちは大切なことを感じ取っていたのではないでしょうか。

12月の目標は「忍辱持久」（教えを知りみんなで努め励もう）です。この教えとは「正しい降り方」を指すのではなく、「困っている人がいたら、助けてあげたいな。やりたいことがあるのなら支えてあげたいな。」自らそう感じ関わっていく姿を大切なことであると伝えていくことではないかと思います。

０歳児から５歳児までの異年齢の子どもたちが関わり合うこども園では、互いに思いを寄せ合っていくことのできる環境を作っていくことが求められます。私たち大人は、手渡すように言葉を使い、温かい表情で見守り、つながろうとする姿、相手をわかろうとする姿を見せていくことを意識していきたいと思います。

副園長　村上真理子